

16の講義内容 書と活字言語(唐顔眞卿と明朝体文字)

書に関する書物及び雑誌は、過去現在を含めて数多く出版されてきた。そのなかで雑誌「書苑」について焦点を当ててみるに、明治・大正・昭和と時代を次いで、書の諸事象についての記事を掲載してきた。当時としては画像印画の余りよくないなかで、活字文字とともに書作品を多数載せていることは嬉しい。ここにも日本語として、「書からみた日本のことば」の特徴を位置づけるにふさわしい内容が多く散見することを以て、この時間の提議題目としてみた。

日本の書とは「縦書き」なり

日本の書を知るうえで、京都大学国文学教授であられた吉澤義則博士の書に対する一言が耳に響いてくる。

「明治天皇の御製に

へをさなくも 運びけるかな 執る筆の 力は我に あるべきものを

とある。書は決して筆端の藝でもなければ、小手先の技でも無い。全人格をさながらに打出した姿に外ならないのであるから、先づ己を深めなければ、書ばかり深くなる筈は無いものである」

「書の友」昭和十五年一月號

のなかに、日本の書が将来進むべき道の極意をこのように提言された。この書論は、戦後日本の書道が歩む道とは一線が引かれていたことは言うまでもない。この流れは戦後六十年を経過した昨今、どのような方向で若い次の世代に伝えていくかという局面に立ったとき、人の内面に及ぶ日本の書が今後どう活かされるのかをここに見定めておきたいという心が動くからだ。日本人の社会組織は凡てのことに右習い方式が多いことは言うまでも無かる。この世界にヒトとしての個性は全く働かない。単一主義に一辺倒そのものなのである。たとえば、部内で回覧される書類一つでも、現在は縦書きで書記したものは一切受け入れないという。とにかく、横書きの書類に統一傾向にある。ある意味での読む思考意欲をとつともなく変えさせていこうとするのは私の感性だけがこう観じているのであろうか……。こうして、手書きではなく、ワープロ入力するときも、縦書き入力を専一にしている私にすれば、横書き入力がどんなに思考回路にそぐわないかをこれまでの経験が示唆してくれたのである。実際に、一時期私自身も横書き入力を実施していたが、この方法では長続きしないことに気づかされたからだ。気づいたら愈々横書きを辞めなくなった。そこでしっかり改めていくことにした。いわば深い底なし沼にずるずると脚を取られるまで前進するよりは、その場を一刻も早く撤退して本来通るべきであった道を選ぶ、この勇気が今の私であり、これこそが日本の書記言語文化には必要だということを痛感するからである。

書の能力開発は、一辺倒主義でいく必要はさらさらないのでから、横書きあり、縦書きありでいいのではなからうか。そこで、私はどうも自分が横書き派ではなく、縦書き派であることに漸く遅まきながらも気づかされた日本人の一人なのである。異国イタリア、ローマでの研究生活がこの難儀な問題を助長していくとつかかりともなったから不思議だ。あのとき、縦書きの日本の書物に私は朝から晩までとっぷり使っていた。パソコンに常備した資料も多く縦書きなのに、打ち出す画面が横で疲労が増していく一方であった。これを或日辞めて、素直に資料の縦書きに順って打ち出していくことにした。実に滑らかにことばが整っていくことに気づきはじめたからだ。このチェンジの経緯が書のはじめにことわりたかった主旨でもある。となれば、どこがどう違うのかを言い置くことも大切である

うから次に気づきの観点を整理しておきたい。

縦書きにしたこと

新聞や文芸雑誌の多くは、今も日本では縦書きを貫いている。でも、その新聞や文芸雑誌でも金銭が絡む広告媒体類は、横書き文字が躍るから言わずもがなかも知れない。慥かに目に飛び込む素早さでは横書きに勝るものはないようだ。瞬間的洞察力は、タテよりヨコが勝る。だが、深慮的洞察力は、ヨコよりもタテが勝ることをここにお伝えしておこう。記憶の消えゆく速度を測定して測ったとき、「萱艸」と「勿忘草」の話を持ち出すまでもなく、このタテとヨコの書記方法は、この影響を真つ向から知らしめていることが判った。素速く見て即座に忘れたいたのであれば「横書き」に限る。じっくり読んで心の奥底に留め置きたいと思うのであれば「縦書き」をお奨めする次第である。人には、一刻も早く忘れたいと思う気持ちと、いつまでも心にしまっておきたいと願う正に裏腹な気持ちがあるからだ。私たち日本人はこの両用を実に旨く使い分けてきた。

覚え書きノートに近い書記資料を企てたとき、横書きを選ぶか多少時間が余計にかかろうが縦書きを選択する自由さがまずある。

次に、文字のバランスがものを言い始める。これは手書きになればなるほどその極度は顕著となる。たとえば、「十」の文字だが、イタリアにいる時、私はこの「十」は「十字架」の対象でもあつたから、常に脳裏に焼き付いていた。この「十」文字が必ずしもバランスよく真ん中になくても漢字の美的バランスは揺るがない。実際、五世紀に書写された「十」文字は左寄りであつたが、「一」棒と「一」棒の長短の長さを以て安定した「天地」の枠取りがなされていた。これを凡て横にして書き出すと、

この天地の感覚的な呪縛から解放され、文字は見事にバラバラに総崩れして並び始める。天地の意識は建築工学ではもっとも崇高なものを意識する。バベルの塔のように縦に高く組み、積み上げていく芸術性溢れる空間が求められるのもそのためにも他なるまいと気づかされた。漢字の縦書きはヨーロッパの叡智ある建築物に等しい。逆にヨーロッパ人が文字を横書きに求めた世界が私のなかで見えてきたのだ。日本は地べたに這い蹲るように平たく凡てを上構築しようとはしなかった。強いて天地を意識した構築物は仏教建築である五重塔に他ならない。実に特殊な建築様式であり、見上げはするものここには人は住まいしなかった。それが故に苦心惨憺して本邦の宮大工職人は、この建物を日本で再現した。それは、逆にヨーロッパの人たちが私たちの意図も簡単に書き出すこの縦書き文字に悩むに似ていたのではあるまいか。私はこの時そんな気がした。

第三に横書きの文章には図絵や写真画が不可欠になる。これに対し、縦書きで書いた文章にはさほど図絵を意識させない。敢えてカラフルな図式をふんだんに用いずともその書き手の意図を読み取る能力が最初から備わっているからだ。喩えていえば、託卵鳥のような遺伝子組織コードが組み込まれているのがこの縦書きの文章であると私は思うようになった。これとは逆に、智慧ある先人に教育されつつ、形成されていく文章が横書きに潜んでいることに気づかされ、私は自分の書いた文章のあちらこちらに図絵を挿入していたからだ。図絵を必要としないことば表現こそが縦書きにあることを伝えたい。

この三つの出来事が私をして「縦書き」で書記することを選択位置づけさせた所以である。あなた方は、このことを聞いて、今後どのように対処して臨むかは、今の私には図れないが記憶の片隅に留めおいて欲しい。

活版印刷字本の流れ

活字文化を知るには、東京に住んでいる人であれば一度は観て欲しい場所がある。飯田橋にある「印刷博物館」である。活字の始まりを間近に観て知る絶好の場所だからだ。日本に印刷された資料は、百萬塔（天平宝字八年）の陀羅尼經である。これは木版刷りの最古の資料である。經典をこうして版木に刻むことで、大量の国分寺奉納のための經文をたやすくして行つた。仏教の經典類が書寫されるのと同じように版木に彫られ刷り出されて行つた。古版本として興福寺の春日版（卷子本装幀）と法隆寺の法隆寺版（粘葉本装幀）が知られている。法隆寺版は、聖德太子信仰に基づく内容となつている。平安時代中期にはその隆盛を見るのである。中世日本には高野山版・根来版・西大寺版が加わつてその資料も増加する。今日そうした活版印刷された資料が罹災や人災などを免れて目に入るのは稀であるが、観ることが許された人は、是非一生に一度は自分の眼で見たい。また、日本の戦国時代を治めた天正一八年の比、西洋から活字印刷技術がもたらされ、日本の天草に據点とした天草学林の宣教師たちが出版した天草版「吉利支丹版」資料が出版される。これは、中世日本語を知る意味でも実に貴重な資料となつている。さらに、本邦の『平家物語』『金句集』『落葉集』『和漢朗詠集』『太平記』と云つた日本の書物だけではなく、『エソポのファブラスの物語』（後に、国字本『伊曾保物語』が編纂されている。これ以外にも『ドクリイナキリシタン』など数十種が此地で印刷されている。なかでも、『日葡辞書』の編纂は圧巻なものがある。日本語の発音表記をローマ字化していたことで、日本の国語資料としても画期的な検証を遺しているからだ。さらには、朝鮮半島で鑄造された金属活字が豊臣秀吉の朝鮮出兵に伴い、朝鮮半島からの文物の一つとして日本に渡来して、一時大阪城に収納され後に帝に寄進している。この朝鮮活字を徳川家康は喉から手を出す思いで欲しがっていたので

ある。これも時の権力者となつた家康がどうかこうにか手にすることになるのだから、人の歴史に見る思惑というものは適えられるものだと思わざるをえまい。この朝鮮活字版で編纂した資料が『古文孝經』（後陽成天皇勅版）の伏見版、そして隠居先の駿河（現在の静岡県）で銅製の活字で刷り出した駿河版が登場し、銅と木に刻んで彫りだした活字約十二万個相當を用いて『大蔵一覽集』（慶長二〇年刊）や『群書治要』（元和二年刊）五十卷等が編纂されている。こうした活字を背景に活版文化は手書きの書寫資料を遙かに凌ぐ勢いで刊行されていくことになった。こうした組み版活字が二十年足らずの年月で寛永三年（一六二六）から寛永七年を境目として刷り版活字に突如変貌を遂げる経緯は定かでないがその製造方法は出版という業界のなかで置換されている。板木刷りの技術職人が勢いを増した理由には、漢字の傍らに振り仮名を付す技術が日本語の場合特に必要とされたことが尤も大きな要因であつたと私は考える。江戸時代の板木印刷は、漢字仮名交じり文に振り仮名を添えて読める技術を巧みに表現し、図会も名所図会・絵本画像入りの作品群が京都・大坂・江戸という三都の版元を代表格元締め据えて、全国各地の有力大名のお膝元で出版文化に広がりを見せていく。組活字は一度組んだものが時季を置いて再版することはできないし、日本語の流暢な連綿文字の印刷には適していなかつた。江戸三〇〇年はこうして刷り版印刷で大量に書物が作られ、武家のみではなく町民の読む活字意識へと発展していった。読本・洒落本・黄表紙（青本）、赤本といった書物が飛ぶように売れ、「絵草紙屋」が「浮世絵」と同時に狂歌絵本を製造販売するのである。都に上つた地方人が国元への土産としたのもこうした刷り版による読み物であつた。

「明朝体文字」について

この板木活字から再び鉛字に替わり、中国の明朝字体がことばの表示に用いられていく。この時期が日本江戸末期から明治にかけて隆盛を迎えるのであり、ことばの辞書として、今までの漢字では『玉篇』、語では『節用集』であったものが意味を理解し、語や漢字だけでなく、ことばの意味やその用例を具体的に網羅した西洋国語辞書とも云うべきへボン編『和英語林集成』が出版されている。初版から三版までが現存する。この複製として、講談社学術文庫から出版されたものがあるが、現在では新刊本の書店で見えることは久しくない。古本屋でも高値で扱われている。この手の活字本は、鉛組み版で磨られ、日本の資料では、江戸時代の狩谷掖齋編『箋注倭名類聚鈔』を孫弟子筋の森立之が明治に和綴じ本装幀の活字版として刊行している。

明朝体文字の特徴は二つある。「ウロコ【▲】」形という

「┌」

漢字の末尾部分を尖らせる表記形態で「鯖の尾」と云うが、この形態もおよそ九類に区分されている。もう一つの特徴が「いなご尻」形で、

「└」 「下」「年」「不」「牢」

とし、縦画の筆の止めおさめを「いなご尻」と云う。

井上ひさし『東京セブンローズ』の活字

井上ひさし『東京セブンローズ』(文藝春秋刊↓文春文庫上下二冊)は、八〇〇頁(原稿用紙一五〇〇枚)に及ぶ大作であり、「正字正かな」で組まれた小説なのである。この小説は、「別冊文藝春秋」

一五九号から二一九号に途中、中断はあるが連載された作品で、連載時期は、活字組版から電算写植(凸版CTS)への移行期であるが、雑誌掲載時にも「正字正かな」を以て組まれている。この「正字正かな」とは、「旧字旧かな」の蔑称意識を嫌った戦後の呼び名であることは理解できよう。「旧字体歴史的仮名遣い」と分けて表現した方がよりわかりやすい用語である。

1 このなかで、「ことわる【断・断】」は、「ことほる」(六七八頁)かという問題が想起されよう。歴史的仮名遣いでは「ことわる」が実は正しい。

漢字表記では「断つて貫ひたくもあつて」(下115③)「日本人お断り」(下161⑩)「交際は断つて」(下304①)がある。

2 「天臺宗」(七四四頁、下371⑰)は、正式名称をみても「天台宗」、「台」字が正しい。他に地名に「駿河臺」(下66⑧)「仙臺」(下341⑧)。

通常の熟語では、「卓袱臺」(上173⑩)。「實驗臺」(下113⑩)。「番臺」(下72⑩)。「舞臺」(下84⑫)。「一臺半」(下166④)。「臺所」(下171⑤・下222③)。「飯臺」(下302⑫)。「前臺たいほく北帝國大學總長安藤正次」(下370④)。

3 「高島屋」(四九頁)「高島屋百貨店」(三〇八頁・文庫一五五頁)は、「高島屋」と「たか」は梯子形の字「高」を用いる。

他に人名「高橋さん」(上171⑱)「こと高橋昭一」(下63⑰)や地名「高輪」(下183③)。

通常の熟語では、「高速度回轉」(上144⑪)。「高壓線」(下79⑮・下80①)。「高官」(上170⑦)。「高級將校」(下176⑦・下356⑦)。「高等女學校」(上170⑨⑬)。「第一高等學校」(上171⑤)。「東京驛高等女學校」(上169③)。「東京女子高等師範」(下178⑥)。「高等師範」(下178⑧)。「高級お役人」(下349⑪・384⑧)。「日本最高のホテル」(下358⑥)。「崇高な」(下372⑭)。「高級役人」(下387⑭)。

4 「佛」と「仏」の意識的意味の使い分けを「いかに佛の源さんでも、怒ったでせうな」〔下369⑥〕の用い方では見えていない。

井下ひさしさんは、こうした旧字体及び歴史的仮名遣いにもあまりにも強く反応する意識から過度の文字遣いや字体に陥ってしまったのである。

その他

◆ 文春文庫（上巻部分）から検索した語一覧

◆ 四つ仮名表記の語

「みづおち」〔上141⑨〕。「おぢいさん」〔上143②⑥〕。「ぢやあ」〔上222⑥〕。「ラヂオ」〔上110②〕〔上114⑦⑧⑫⑬〕〔上158⑬〕〔上223⑭〕。「エンヂン」〔上223⑮〕

☆ 洋語漢字表記の語

「丁抹の王子」〔上164⑤〕。「燐寸」〔上328⑪〕。

◆ 文春文庫（下巻部分）から検索した語一覧

□ 「お・オ」と「を・ヲ」表記の語

「一昨日」〔下53④〕。「一昨昨日」〔下228⑪〕。「夫婦煙管」〔下234⑨〕。「一昨年」〔下379⑱〕。「乳母日傘」〔下381⑰〕。

◆ 四つ仮名表記の語

「おやぢさん」〔下30②⑧⑬⑱〕。「づかづかと」〔下53⑤〕。「するんぢやなかつた」〔下53⑰〕。「蛞蝓」〔下23⑭〕。「むづかしい字」〔下114⑭〕。「ラヂオ」〔下71⑰・下78⑭・下117⑭⑮・下213⑩⑪⑫⑬〕

⑬⑮・下224②)。「スタヂオ」〔下160②・下161⑦⑪・217⑪・223⑭⑯⑰⑱・下224⑫〕。「直接に」〔下227⑮〕。「直に」〔下309④〕。

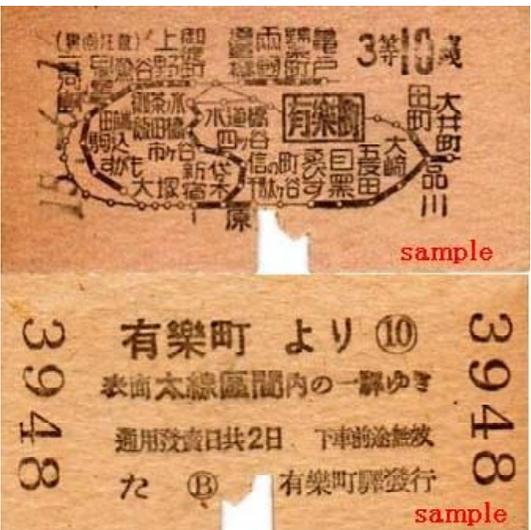
「蛇の道は蛇」〔下22⑯〕。「肥後芋莖」〔下32⑥〕。「色白」〔下39⑩〕。「玉に瑕」〔下46⑩〕。

◇ 略語の仮名遣い語

「ラクチャウの女たち」〔下75⑦⑫〕「ラクチャウ組」〔下76⑦⑧〕 ↓ 「有楽町」の巻頭省略語。

※現在の私たちは、「有楽町」と表記する。「有楽町」とは表示したものを探す方がむづかしい。「有楽町層の微小古生物學的研究」という論文名がある。

『茶道正傳集』の作者である「織田有楽」という人物名 → <http://urakusadou.jp/>



次に文字表記の意識を知るうえで、面白い場面を載せているから紹介しておこう。

○「教科書といふと？」「みんなで國語の勉強をしてゐるところなのさ。昔とつた杵柄といふのかね、ともゑさんて教へるのがとても上手なんだ」いふか早いか、お仙ちゃんは奥との境の鴨居にぶら下げてあつた小さな黒板に寄つて、「ニカイの女は木がへんだ、ロロタイチのイヌ、サムライのフエはイチインチ」と唱へながら、櫻、獸、壽と漢字を三つ書いた。たしかに櫻は二貝の女は木が偏であるし、獸を分解すればロロタイチのイヌになり、壽も同じ原理である。「ね、覺え易いぢやないか。あたし、商賣柄もあつて、壽といふ字をよく使つたものよ。でもそのたびに忘れて字引きの御厄介になつてばかりゐたわ。でも、サムライのフエはイチインチと覺えたからはもう忘れない。ともゑさんからかういふのたくさん教へて貰つてゐるところ」「口唱記憶法といふんですよ。漢字はむづかしくて、覺えにくい。漢字學習は地獄の責め苦だといふ方が多いけど、そんなことはないんです。楽しく勉強するやり方はたくさんあるんです」

聞いてゐるうちに思ひついたことがある。ともゑさんにホール課長の理論が論破できるだらうか。「日本から一切の文字がなくなつてしまつても大丈夫だといふ意見をどう思ひますか。文字がなくなつても話し言葉が残るから一向に構はないといふんですな」「愚論ですわ」「どうしてでせう」「話し言葉は必ず變化します。變る運命にあるんです。でも書き言葉はその話し言葉の變化を超えた次元で、それぞれの概念を直接的に、そして視覺的に、はつきりした形で表すことができますわ。なんだかむづかしい言ひ方になつてしまつた。……言ひ直します。話し言葉はもともと變つて當り前なんです。ふはふはしてゐて自由自在、それが話し言葉。書き言葉の方は残ります。たとへるなら話し言葉は船で、書き言葉は錨でせうか。錨があるおかげで船は流されずにすみます」「なるほど」「ですから、書き言葉のおかげで、時間的には、何百、何千年にもわたつて綿々と文化が傳へられるわけですし、空間的には**一億の同胞**と交渉を持つことができます。そして書

き言葉は、今を遠い未來へと繋ぐこともできる。この仕事は話し言葉にはむづかしいんぢやないかしら。ですから文字がなくても日本語が残るなんて樂觀的すぎるわ」「ローマ字も書き言葉でせう。漢字や假名をやめてローマ字にするといふのはどうです」「ですからそれでは縦の、時間的な繋がりが斷たれてしまひます。未來の日本人に昔のことがわからなくなりませう」

このともゑさんと新聞社に出ておいでの高橋さんがこつちについてゐてくれるならホール課長の理論に勝てるかもしれない。「文春文庫下巻188④」190④」

○「岐阜に愛媛、栃木、茨城、どれも字畫が多いし、読みも難しい地名のやうに見えますが、その縣に住む人間にとつてはちつとも難しいことなぞありやしません」高橋さんは「こつちを遮つて、拾ひ上げた小枝で地面に「巖」といふ字を書いた。「わたしの名前にしてもさうで、高橋巖の巖の字などは小學一年生のときからちやんと書いてゐました。そこで字畫の多いのがたくさんあるから漢字は難しいなどといふのは取るに足らぬ俗論です」」202⑮」203②」

○「字畫の多いのがたくさんあるから漢字は難しいといふのは取るに足らぬ俗論です」午後二時、東京放送會館五階のCIE言語課に現れたロバート・キング・ホール少佐にかう議論を仕掛けた。もちろん、昨日、權現様で高橋さんから教はつたことの受け賣りだ。「よろしいですか、少佐。日本の小學一年生でも、たとへば、鯨や湊や錦や邸といふ字が讀めるし、また書けもするんですよ」少佐用の机の備へ付けの便箋に少佐愛用のパーカー万年筆でそれらの字を書いて見せた。「小學一年生になぜそんな藝當ができるのか。じつはこれらの漢字は小學生の大好きな力士の四股名なんです。ラヂオや新聞で、鯨ノ里、出羽湊、九州錦、大邱山といふ四股名を初中終、讀みかつ聞く。だから連中には難しいとは思へない」「おもしろい話ですな」〔下巻203⑤」⑩」

○「また、彼等は、壇、櫓、擲、蹴といった漢字も難なく讀みますし、中には書くことのできる子もをります。小學一年生がですよ。信じられますか」「その秘密は……」〔下巻204②」③」